研究集会「宋元史料研究の現況」報告

2009年12月5日の午後、仙台の東北大学文学部棟611教室をお借りして、研究集会「宋元史料研究の現況」を開催した。当日の研究報告の要旨は次のとおり。

1　劉暁（中国社会科学院）　元代大道教史補注―以北京地区三通碑文為中心

※後日本誌に論文として掲載の予定なので、要旨は省略

2　櫻井　智美（明治大学）　『天一閣明州碑林集録』と元末の慶元路

『天一閣明州碑林集録』（章国慶編著、上海古籍出版社、2008.4）を近年出版された石刻書の一例としてとりあげ、その特徴から石刻関連史料の出版動向を探った。元代の石刻については、新出史料が4点（17種中）あり、新出史料の紹介として価値が高い。碑亭内での保存現況や碑刻の剥落状態を明示する点などは、近年の石刻録文集としては画期的なものであり高く評価できる反面、各碑文につけられた「簡叙」は簡略で、かつ先行資料提示について網羅性を欠き、それは中国の伝統的な金石書の様式に近いと感じられた。

碑刻の内容について検討を進めると、元の中期から後期にかけての地域社会の様相について、いくつか指摘できる点が出てくる。万国珍治下の慶元路について有用な新出碑が2点あり、万国珍統治を賞賛する内容から、地域社会の安定を希求する撰者の意図が読み取れる。また、元の中期から後期にかけての碑刻が多数現存しており、現存する碑刻の割合は相対的にかなり高いと考えられる。文集所収の元末資料とあわせて内容を検討すれば、当地の士人たちがそれぞれ決まった学校に帰属している様子が見られ、学校が士人社会の形成に一定の役割を果たしていたことがうかがわれる。元末の碑刻中に彼らの名前が漏らさず列挙される傾向については、碑刻に名前を残すことが自身の立場にとって意味のあることだった状況を表していよう。

3　渡辺健哉（東北大学）　日本におけるモンゴル時代史研究黎明期の史料蒐集―内藤湖南の活動を中心に―

本報告では、『京都大学人文科学研究所漢籍目録』（京都大学人文科学研究所、1980年）「内藤文庫」に掲げられている「經世大典殘卷　元趙世延等奉勅輯　清文廷式輯　鈔本」に注目し、この書物が内藤湖南（1866-1934）の手元に渡る経緯の解明を軸に、内藤湖南によるモンゴル時代史史料の蒐集について検討を加えた。これまでの研究によって、内藤が「満蒙」史料の発掘に努め、清代の満州・モンゴル史料に注目していたことは度々指摘されてきた。しかしながら、元代史料の蒐集についての指摘はまとまった形

ではなされてきていない。本報告では、その点を明らかにすることを通じ、併せて従来の内藤湖南研究の問題点も指摘した。

具体的には、内藤と文廷式（1856-1904）との交流の諸相、及び『元朝秘史』『経世大典』『大元聖政国朝典章』という、モンゴル時代史を研究する上で格別に重要な史料の入手経緯について、『内藤湖南全集』未収録の資料も利用しながら、それぞれ検討を加えた。

4　森田　憲司（奈良大学）　墓誌は四角い　―『新中国出土墓誌・上海』から

一般的に墓誌といえば、真四角というイメージがある。拓本の法量を記載する『東洋文庫所蔵中国拓本目録』を見ても、縦長は少ない。これに対し『新中国出土墓誌　上海・天津』の上海部分では、北宋２つは横長であるのに対して、南宋はすべて縦長である。最近森田が取りあげた臨海出土の墓誌の場合も、この傾向は変わらない。

分類・命名という視点から考えると、「墓誌」という命名はかなり広い範囲で使われており、原石では墓誌と称していないものも少なくない。こうした「縦長の墓誌」には、「壙誌」、「壙記」という原題が付されているものが少なくなく、これらを墓誌と同じに扱っていいのかということを考える必要がある。縦横の比だけでなく、「納諸壙」、「納諸幽」などの表現の存在や「填諱」の存在、執筆者のほとんどが葬主であるなどの共通点が、これらの「墓誌」には見出され、それらをその類型基準とすることができよう。

また、その多くが南宋～元の江南のものであり、出現時期や出土地域についてもかなり特徴がある。ただし、『新中国出土墓誌・重慶』の場合もそのほとんどが縦長だが、上記の要素とは合わず、より細かい単位での地域差という問題も考えねばならない。

近世江南の墓誌については、拓影を収めた資料集が少なく、情報が十分ではないこともあり、日本の石刻研究での関心も低いが、今後新出土史料を取り込みながら、その対象となっている社会階層の問題も含めて検討をすすめていくことを考えている。

5　船田　善之（九州大学）　金元代石刻研究と現地調査

近年，石刻史料を活用した金元代史研究が盛んである。しばしば言われているように、石刻史料の魅力は、新出や新紹介の史料が少なくない点やそれらが往々にして典籍史料に残っていない記述を含む点などにある。当然のことながら、石刻史料を利用するにあたって、録文よりも現物である原石、ないし準現物である拓本に基づくことが求められる。

このような趨勢の下、また、各種条件の好転により、日本の研究者が石刻史料の現地調査を実施するようになっている。現地調査の意義としては、まず録文・拓本では知り得ない情報の獲得が挙げられる。また、移動・摩耗・散逸の危険に直面している石刻史料の原状・現状を記録することも喫緊の課題である。

本報告では、報告者がこれまでの現地調査を通じて培ってきた経験や知見を踏まえ、

金元代石刻研究と現地調査に求められる視角・姿勢と今後の展望を述べた。これらは、報告者が現地調査を開始した当初における主たる目的、すなわち原石に基づいた従前の録文の修正や刻文に関する情報（文字の大小・字体や字配りなどのレイアウトなど）入手とは別次元の新しい視角である。第一に、張柔墓に現存する二通の石刻、至元十四年「大元故蔡国張公神道碑銘」と大德四年「有元故中奉大夫河南江北等処行中書省参知政事張公神道碑銘并序」を事例として、石刻の大小や構造、さらには墓域を総合的に分析・検討する必要性を提起した。第二に、塩池神廟（山西省運城市）・永楽宮（山西省芮城県）・駝山昊天宮（山東省青州市）などを事例に、寺観祠廟における石刻の配置が、重修の過程や建築プラン、さらにはその戦略と意図を解明する材料となる可能性を提示した。また、石材再利用の問題についても言及し、この二つの視角がその考察に有効であることを主張した。

6　松川　節（大谷大学）　再発見された『勅賜興元閣碑』の新断片

モンゴル帝国の首都カラコルムの地に16世紀に建立されたエルデニゾー寺院は、モンゴル国に現存する最古の仏教寺院であり、2004年にユネスコの世界文化遺産にも登録された。2009年9月、現地における調査によって、1346年にカラコルムで建碑された漢文・モンゴル文による「勅賜興元閣碑」の一断片が新たに発見した。

今回、確認された断片は、今からおよそ100年前、1912年にポーランドの学者コトヴィチがエルデニゾーの外壁の西門近くに造られた仏塔の根元にあると報告だけしていたものである。2009年9月9日、日本・モンゴル共同学術調査隊が現地で仏塔の根元を探索した結果、コトヴィチの指摘どおり、碑石のモンゴル文面が露出していることを確認した。碑石はエルデニゾー博物館員によって取り外され、収蔵庫に保管された。

碑石は縦40センチ、横30センチ、厚さ40センチで、漢文面は計7行38文字、モンゴル文面はウイグル式モンゴル文字で書かれ、全部で13行。断片的ながらも qing ön geü süm e-yin ger「興元閣寺閣」や、busud i ker tonilγaγulun čidaqu kemen「他人をいかに解脱させることができるかと言って…」といった仏教的内容が見られる。

以上の報告終了後、研究代表者の村岡倫（龍谷大学）が、総括コメントをおこない、出席者からの質疑などもあって、盛況裏に会は終了した。また、会の当日午前および翌日には、本科研メンバーによる、東北大学付属図書館所蔵史料、とくに常盤大定旧蔵拓本などの調査もおこなわれた。当日、ご参加、ご協力いただいた東北大学をはじめとする関係者の皆様にお礼申し上げたい。

（文責・森田憲司）